

イザヤ書 第42章3節

「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす」

感染症のせいか、道路を行き交う車がやや少なく感じる。行き交う人々の数も少ないのではないかと感じさせられる。今日は初冬とも思えないあたたかな日である。青空が澄みわたり、風がそよぐ、心地良い。道路傍の枯れ草が風になびいている。枯れ切って、緑が一片も残っていないのに、真っ直ぐに立ち、風を受け揺れている。

初春には、道行く人々の目に青々としたいのちの輝きを見せていたはずである。しかし、今はその面影が全く無い。それでも、見ようとする者の目には異なった輝きをもって愛しむところを与えている。それまで生きて来たしるしがあるから。季節の移ろいをその場で生き、最後まで生きる姿を見せるから。いのち枯れても、草の形が崩れていない。地中深く根をはったまま、風を真っ直ぐに受けて立つ。

そして、なによりも目が惹かれるのは、枯れ草のいっさいを包む天地万物の創造主のみこころである。枯れ草物語を時とともに語られる創造主の風である。いのち果てたような路傍のものに風をそよがせ、揺らしてみせる。